

〈中学生の部〉

・最優秀賞	17
・朝日新聞社賞	18
・紀伊國屋書店賞	20
・新潮社賞	21
・東京理科大学賞	23
・二松学舎大学賞	24
・くまもと賞	26
・佳作	27

〈高校生の部〉

・最優秀賞	37
・朝日新聞社賞	38
・紀伊國屋書店賞	40
・新潮社賞	41
・東京理科大学賞	43
・二松学舎大学賞	44
・くまもと賞	46
・佳作	47



中学生の部

最優秀賞

『吾輩は猫である』を読んで

新宿区立落合第二中学校 2年

もとくら
元倉 稜太

作品名『吾輩は猫である』

選んだ一行

人間にせよ、動物にせよ、おのれを知るのは生涯のだいじである。

「人間にせよ、動物にせよ、おのれを知るのは生涯のだいじである。」

生活様式や価値観が大きく変化した明治の時代を生きる人々は、猫である「吾輩」の目にどう映ったのでしょうか？変化に対応できなかったり、適応しようとするあまりに自分を見失い、流されて溺れているように見えただのではないでしょうか。社会に変化を起こしているのは人間で、そのスピードについていけないのもまた人間で、そこに起こる歪みや違和感を、「吾輩」はユーモア溢れる表現で批判していきます。

自分たちが今まで築いた文化や、歴史の上にある習慣を無視して、食や服装を形だけ洋風にしてみたり、意味を理解してないのに暗記しただけの外国語を使う姿を、「吾輩」は冷めた目で見つめています。

この「吾輩」の目を通した物語が、僕たちにも面白いと感じられるのは、今を生きる僕たちにも「吾輩」の冷めた目を感じる時があるからだと思います。むしろ、変化のスピードは増して、変化に対応できない人や、適応するあまりに何かを見失う人は増えているのではないのでしょうか？生活は便利になって、大量の情報がスピード上げて通り過ぎていきます。それでも、僕たち人間の能力はたいして進歩していないのですから、そこに起こる歪みや違和感は、明治時代の人のそれより大きいでしょう。

そんな僕たちを見て「吾輩」は何を思うのでしょうか？便利になって空いたはずの時間用事を詰め込んで追われるように過ごし、流れてくる情報の真偽も確認せずなんとなくやりすごして、やってないのに知識だけで分かっているつもりになっていき、SNSを見ては自分と比べてしまう。「吾輩」は、『SNSはうぬぼれの醸造器であるがごとく、どうじにじまんの消毒器である。もし浮華虚栄の念をもってこれにたいするときはこれほど愚物を扇動する道具はない。』とでも言うのでしょうか。

しかし、「吾輩」はこうも言っています。『おのれを知ることができさえすれば人間も人間として猫より尊敬を受けてよろしい。そのときは吾輩もこんないたずらを書くのはきのかうだからすぐにやめてしまうつもりである。』

僕は、この作文を書く間に、自分の字が汚いこと、漢字がうろ覚えなことを知りました。何度も消しては書き直し文が書けないことを知り、消しゴムで用紙を破き自分が雑なことを知りました。それで、もう鉛筆は諦め word で書くことにしました。そうして「猫より尊敬を受けてよろしい」自分に、昨日より一歩近づきました。そんな僕を今日も「吾輩」が冷めた目で見つめています。

審査講評

作中の「鏡」を「SNS」に置き換えてみた点に共感できる。独特のリズムとユーモアがあり、達者さが借り物でなく身についている。

朝日新聞社賞

言葉そのものの美しさ

新宿区立落合中学校 1年

石戸 いしど 智恵 ともえ

作品名『夢十夜』（第一夜）

選んだ一行

真白な百合が鼻の先で骨に徹えるほど匂った。

この第一夜は、夢十夜の中で一番言葉そのものの美しさが感じられる物語だと思う。

今回の課題のために、夏目漱石を初めて手にとった。夢十夜を選んだ理由は特になく、ただ図書室の本棚にあったからだ。夢十夜は、漱石の書いた短編集程度の知識しかなかったため、どんな物語なのか全く想像がつかなかった。でも読み進めてみると、今まで親しんでいたような作家の物語とは全然違うのだと気づかされ、読んだことがないジャンルで面白く思えた。私はこの物語を読んだときに、女が死んで、百年後に百合に転生して男と再会するファンタジーなのだなと思った。今風でロマンチックな物語に心がうばわれた。どん

なところにひかれたか書いていこうと思う。

まず、女は死ぬ前に、

「死んだら、埋めてください。大きな真珠貝で穴を掘って。そうして天から落ちてくる星の破片を墓標に置いてください。そうして墓の傍に待っていて下さい。また逢に來ますから」と男に言う。真珠貝も星も綺麗なものだが、墓の傍で待っていてとは、なんて怖いことを言う女なのだろう。綺麗な言葉と一緒に言っているから余計に怖い。女はきつと転生できるように願掛けをしたのだろう。星は女の魂だろうが、真珠貝はどこからでてきたのだろう。真珠と言えば伊勢の人だろうか。伊勢は神話伝説があるから、ますますロマンチックだ。

この物語の時間経過ははつきりと描かれていない。でも、墓穴を掘っているのは夜で、日にちを数えているのは夕方、女が転生したのは明け方だ。それぞれ「月の光」や「大きな赤日がのっと落ちていく」ことや、「暁の星の瞬き」の言葉でいつか感じられる。そこが幻想的な雰囲気を出している。

次に、色の表現についてあげる。暖かい血の色、黒眼の色沢、大きな真珠貝、唐紅の天道、苔の生えた丸い石。頭の中に景色が浮かんでくるようだ。このような、たくさんの色が出てくるのは主に物語の前半部分だ。物語の後半になると、登場する色が白に集約されてくる。白は、女についての表現に使われている。例えば、死にかけの女のことを表した文に

は、「真白な頬」と描かれている。その後女が生まれ変わった百合は「真白な百合」、「白い花^{はなびら}瓣」。露が滴る、という言葉も、真白な花びらを想像させて引き立つ。カラフルな世界から真白な、女が転生する瞬間へ場面は移る。ここで、同じく白を連想させる言葉が出てくる。骨、だ。この文章こそが私の選んだ一行だ。

「真白な百合が鼻の先で骨に徹えるほど匂った。」

この文の強烈な表現に私は心が動かされた。骨に徹える、とはよほどの匂いなのだろう。骨まで匂いが来るとは、女の思いが男の体の芯まで届いたということだろうか。実際に百合を買って匂ってみると、青臭くて、濃い香りがした。

そしてそんな美しい表現の数々の中で、面白いことに気がついた。百年後、女は百合に転生して男に逢うが、「百合」という字は「百に合う」と書く。

漱石先生、これはわざとでしょうか。

審査講評

時間経過の表現、色の表現についての分析は立派な文芸評論。「骨に徹えるほど匂った」の一文に感じ入り、実際に百合を買って匂ってみた体験にも感服した。

紀伊國屋書店賞

漱石の手紙

白百合学園中学校 1年

今井 友梨

作品名『こころ』
選んだ一行

「この手紙があなたの手に落ちる頃には、私はこの世にはいないでしょう」

私が一番好きな小説家は、夏目漱石だ。その中でも、『こころ』は、何度も読みたくなる名作だと思う。読むたび、いつも新しい発見があるからだ。それは、漱石が、文を手紙形式で書いているせいもあるかと思う。最初私が「こころ」を読んだときは、ストーリーを早く知りたくて、細かいところまで気を配って読まなかった。しかし、繰り返し読んで読むと、手紙の文章の中に、手紙だからこそ伝えられる、あるいは、手紙という形式特有の効果があるのではないかと気付いた。だから、今回私が選ぶ、漱石の一文は、『こころ』の中編で先生が遺書の中で書いた「この手紙があなたの手に落ちる頃

には、私はこの世にはいないでしょう」だ。

私がこれを選んだ理由は、この一文が、私の心に響いたからではない。この文が、小説のトリックとして、いかに効果的な技巧かと思ったからだ。読者は、この文を読んだ瞬間から、小説の中の遺書の読み手である「私」と共に、手紙を読み進めていくことになる。先生の安否を確認しようと、長い手紙を飛ばし読みしている「私」と自分を重ね合わせ、焦る気持ちで、小説のページを読み飛ばしていく。「私」になった読者は、後で汽車の中で読もうと袂に投げ入れた手紙が落ちないか、何が書かれているのか、やきもきし、「必要な知識を容易に与えてくれない」この手紙に心が掻き乱される。この時点でもう、漱石のミステリー小説のような技法にどっぷりはまる。

夏目漱石は手紙好きだったと、どこかで聞いたことがある。漱石の全集には、手紙がかなりの部分を占めているらしい。私は、ふと、漱石が現代に生きていたら、どんな小説を書いただろうと考える。ラインよりはメールを好みそうな漱石だが、『こころ』の小説の構成はどうなっていたらうか。先生は、遺書を投函する日と私が受け取る日の間に命を絶つのだが、その郵便配達のブランクに、誰にも知られずに亡くなることが出来る。これがメールだったら、どうだろう。自殺未遂になるだろうか。だから、今も遺書は一般的にメールや

新潮社賞

交錯する子規と漱石の想い

学習院中等科 3年

にしわき
西脇 和真

作品名『子規の画』

選んだ一行

拙くてかつ真面目である。

ラインではなく、死後に発見される置き手紙となる。そう考えると、遺書が投函された時点で、それを受け取るべき人が必要になってくる。妻（お嬢さん）は、先生が過去を知られたくない、またショックを与えたくない守るべき存在として描かれているので、やはり、手紙の受け取り人として「私」の存在は不可欠だったと思える。家族でもない「私」が遺書を受けとっている異色なストーリーにも関わらず、その不自然さを感じさせない夏目漱石は、やはり偉大な作家だと言えるだろう。猫を語り手としたり、出会ってまもない「私」を遺書の受け取り手とするなんて、何て自由な発想をする作家なのだろうと、改めて考えた。時代を超えて多くの読者に愛される漱石の作品をもっと読んでいきたい。

審査講評

『こころ』の物語内容よりも漱石の選択した構成・手法に注目している点が秀逸。文体も明晰。

子規の画。子規の描いてくれた一輪挿しの東菊あずまぎくの絵。

漱石は子規の描いてくれた絵をずっと袋の中に入れていた。それを子規の形見だと思っていたからだ。それでも彼が三十四という若さで死んでからもう十年が過ぎ年が経つに伴れその袋の所在を忘れることもよくあった。

漱石はふと思い出し、子規のくれた絵を掛物にでもしようとして絵を探した。出てきたのは四つ折りに畳まれ湿っぽくなっていた絵と幾通かの子規からの手紙だった。

いざ壁に懸けると、なんとも淋しい。一輪挿しの東菊で開いた花はたったの一つ。周りは白、さらには表装の絹地は藍だった。

ではなぜ子規は東菊を書いたのだろうか。東菊は東日本にしかない花。子規がこの絵を描いた時期は結核発病から五年がたち、苦しい闘病生活の渦中にあった時だ。きつと熊本にいる漱石に帰ってほしい、傍にいて欲しいと願ったのだろうか。

子規はこの絵に骨を折ってやつとの苦勞で描き上げた。しかし、漱石はただ一言「拙くてかつ真面目」と評した。私は、友が漱石のためにその病に侵された体を振り絞って書きさらには熊本まで送ってくれたというのになんだその言い草は、と思った。

でも漱石は、子規の絵に「拙さ」を見出しただひたすらに嬉しかったのだろう。

漱石は子規と交際していったどんな日にも、彼の拙さを見ることはなく、漱石が彼の拙さを笑い得る機会を捉えることもなかった。

それが彼の死後十年にもなつて、再び思い出した絵、子規が漱石に描いてくれた東菊の絵の中で、漱石はやつと子規の拙さを知ることができたのだった。しかし、そのころには漱石は子規の拙さを笑い得るということはできなかった。

なんと淋しいことか。友の知りたかった面を、その友亡きあとに垣間見るとは。わたしは子規と漱石の間に深い交流があったことを知っていた。しかし、漱石だけが取り残された後の子規と漱石の関係を考えたこともなかった。そも、亡人

との関係なんて、大切な人を亡くしてからでないと考えていることもないと思う。わたしはまだ大切な人を失ってはいない。だからこそ、これまで漱石が一人になったあとの二人の関係なんて、考えもしなかった。どんな人間でもその関係性なんて、切っても切れるものではない。たとえ片方が、もしくは両方が没しても。当然だ。どちらかがいなくなれば終わる関係なんて、ないに決まっている。

漱石は、子規が拙さからもっとかけ離れていると思っていた。そして、子規の拙かろうとも漱石のために骨を折り、絵を描いてくれた想いに、子規の没後十年がたつてから気づいた。ここに、何事にも代えられない深い淋しさを感じた。

審査講評

親友の絵を「拙くてかつ真面目」と腐した漱石に一度は反感を持ちながら、畏友の拙さを没後10年経って見出した漱石の嬉しさ、淋しさを読み取ることができている。

先生の遺言から

世田谷区立桜木中学校 3年

高尾 たかお 碧泉 あおい

作品名『こころ』

選んだ一行

一人で好いから、他を信用して死にたいと思っている。あな
たはそのたった一人になれますか。

「先生」に残された道は、死より他になかったのだろうか。私は、これまで与えられた命を生き抜くことの尊厳を学び、その姿勢に疑う気持ちなど生じずに生きて来た。だからこそ、先生の死に疑問を持たずにはいられなかった。

先生は、信頼していた叔父の裏切りを契機に、人間不信に陥った。更に、心を許した友人のKを裏切り、彼の死を招いた。この二つの出来事は、先生にとって、人間を信じる根拠を根底から失わせることだった。それは、「一人で好いから、他を信用して死にたいと思っている。あなたはそのたった一人になれますか。」という遺書の言葉に、先生の絶望と渴望

が最も凝縮されている。人を信じたいと切望する一方で、裏切られた記憶によって人を信じ切れない。矛盾を抱えた心情が、この言葉は、最も象徴的である。

また、この言葉は、妻ではなく「私」に向けられた点にも注目すべきだろう。先生は最も近い存在である妻にすら本心を明かせず、死の直前になって、ようやく一人の若者に自分自身の真実を託そうとしたのである。そこには、罪を共有することと妻の「純白」を汚すことを回避した先生の思いが働いている。しかし、結果的には妻を沈黙の中に置き去りにし、新たな苦悩を背負わせることになってしまった。先生の死は、自己救済であると同時に、他者に向けた生の責任放棄でもあった。

先生の心は、自己のエゴイズムに完全に支配されていたのだろうか。私は、先生を死へ追い込んだ人間の罪の「恐ろしい影」や「物凄く閃めき」とは、裏返すと、生きて他者を信じ続けたかった告白でもあると考える。つまり、人間への信頼が不可能だと直面した先生は、その不条理を抱えて生き延びることを選ばず、死で封じ込めようとしたのだと思う。

また先生の良心は、最期まで失われなかった。何故ならば、良心を持たない人間なら、自分が犯した罪に気付くこともできず、苦しみも感じることもすらないからだ。先生の死は、人間の良心が生み出した矛盾の極致であり、葛藤の中でもがき

苦しみながら自分を死へと追い込む先生の心は、あまりにも哀しい。私自身の心の奥底に潜むエゴイズムと、どう闘うのか。理想と現実の狭間で、私はどう立つのか。先生から私に、直接問いかけられているように思えてならなかった。しかし、今の私には、その問いへの返答はできないままだ。

しかし私は、自分自身の心の中に、決して揺れ動くことのない確かなものの存在に気付いた。それは、「生きる」ということである。「一人で好いから、他を信用して死にたい」という先生の願いを前にして、私は敢えて逆に「生きて人を信じたい」と思う。人間の心の弱さや残酷さを理由にして死を選ぶのではなく、むしろその矛盾を抱えながら生きることこそ、人間の尊さなのではないだろうか。

これから先、挫折した時には、この『こころ』の「生」を思い、手放さないでいたい。

審査講評

「先生」が死を選んだことへ率直に疑問をぶつけ、あらゆる種の反面教師としながら、自らの感想を素直に述べる純粋な気持ちが素晴らしい。

二松学舎大学賞

迷いとともに生きる

筑波大学附属中学校 2年

荒井 あらい 雅佳 もとか

作品名『三四郎』

選んだ一行

「迷える子——解って？」
「迷える子——解って？」

「迷える子——解って？」美禰子のこの一言に、私は思わずページをめくる手を止めてしまった。「解って？」という問いは、都会の空気や人間関係に戸惑う三四郎だけでなく、私自身にも向けられているように感じられた。美禰子の言葉は、単なる確認ではなく、私の心の奥に潜んでいた不安や迷いを言い当てているようだった。そんな美禰子も、「われは我がとがを知る。我が罪は常に我が前にあり」と語る。彼女は気持ちに背を向けた選択の苦しみを理解していた。それでもその道を選び、三四郎から離れていく。美禰子は、自分の選択がもたらす葛藤を心に受け止めながら、内面にある「迷い」や「弱さ」を受け入れ、「生き方を決めるのは自分自身」

と強い意志をもって生きている。その姿勢に、私は深い衝撃を受けた。

物語を読み進めると、三四郎、美禰子だけでなく、広田、与次郎、野々宮もそれぞれの「迷い」を抱えていることがわかる。三四郎は、恋心と自分らしさの間で揺れながら、自分の気持ちに正直になれずに悩んでいる。美禰子は多くを語らない中で、心に複雑な思いを抱えている。広田は、物事を深く考えるあまり、人との距離を感じながら孤独を受け入れているように見える。人間は誰しも「ストレイシープ」なのかもしれない。そのような姿は、現代を生きる私たちにも通じる。進路、人間関係、社会との距離感など、私たちもまた日々の選択の中で迷いながら生きている。だからこそ、彼らに深い共感を覚えるのだ。登場人物たちは、私たちの葛藤や孤独を映すようで、読むほどに心が揺さぶられた。

迷いがあるからこそ、美禰子は名刺という「存在の証」を持つていたのかもしれない。明治時代の女性が名刺を持つこと自体、非常に珍しかったはずだ。しかも、その名刺には「名前と地名」しか書かれていない。肩書きも連絡先もない、ただの「存在の証」。それを男性に差し出す美禰子の行動は、控えめながら、自分の存在を主張しているように感じられた。この名刺は、美禰子の謎めいた存在感を物語っているように思う。「私をどう見るかは、あなた次第」。そう語りかけるよ

うに、自分の存在をそっと刻みつけていた。

この作品を通して、私は「迷いながら生きること」の意味を考えた。迷うことは、弱さではない。むしろ、自分の内面と向き合い、問い続ける強さなのだ。美禰子の言葉も、名刺の行動も、三四郎の揺れ動く心も、すべてがそのことを教えてくれた。

『三四郎』を読み終えた今、私は少しだけ、自分の「迷い」を肯定できるようになった。人生はストレイシープ。だからこそ、自分の選択の意味を理解し、自分の歩みを信じて進んでいくしかない。漱石の言葉に導かれながら、私はこれからも、自分自身の「迷い」とともに生きていきたい。迷いながらも、自分の存在を問い、確かめていくこと。それこそが「生きる」ということなのかもしれない。

審査講評

美禰子の名刺の解釈は自分なりによく咀嚼して分析できていて良い。登場人物の内面への言及が深く、表現力も優れている。

くまもと賞

碁石

筑波大学附属中学校 2年

やまだ さくらこ
山田 桜子

作品名 『吾輩は猫である』
選んだ一行

碁を発明したものは人間で、人間の嗜好が局面にあらわれるものとすれば、きゅうくつなる碁石の運命はせせこましい人間の性質を代表しているといってもさしつかえない。

私は『吾輩は猫である』を小学生の頃から何度も読んできた。読んでいるうちに印象に残る箇所は変わってきたが、最近に残ったのが「碁石の運命」を人間に重ねる一文だ。この表現に、滑稽さと同時に鋭い人間観察が込められていると感じた。

一見するとこれは皮肉にすぎないように見える。しかしよく考えると、漱石は「碁」を人間の営みの象徴として取り上げ、そこに人間社会の縮図を見出しているのではないだろうか。碁石は白と黒に分けられ、狭い盤面の上にきちんと並べ

られる。碁石自体には自由がなく、人間に打たれるがままに配置され、最後には勝敗のために取られてしまう存在である。その姿は、自由を求めながらも社会の枠組みに押し込められ、細かい規則に従って生きざるを得ない人間そのものを映し出しているように思われた。

私はこの見方に妙に納得させられた。人間は理性や文化を誇るが、実際には「社会」という盤面の上で決められたルールに従って生きている。学校の規則や国の法律は尊重すべきものだが、同時に私たちの行動を大きく制限する。さらに、他人の目を気にして自分の役割を思い込むことによって、与えられた位置から外れることが難しい。碁石が一度打たれた場所から動けないように、人間もまた社会の力によって配置され、動きを縛られているように感じられる。

また漱石は「きゅうくつ」「せせこましい」といった言葉を用いることで、人間が持つ小賢しさを浮き彫りにしている。人間は大きな理想を抱いていても、実際には損得勘定や体面にとらわれ、目先の細かいことにこだわってしまう。そのちっぽけさを碁石に託して語るところに、漱石ならではのユーモアと風刺がある。そして、語り手が、人間の外側にいる猫だからこそ、人間を「せせこましい」と皮肉を言うことができる。

私は、この一文を自分の生活にも重ねて考えるようになった。

た。私は学校生活の中で「こうしなければならぬ」と決められた枠の中で過ごしている。時には息苦しく思うが、ふと振り返るとその悩みは案外小さなことにすぎないのかもしれないと気づかされる。碁石のようにせせこましい存在だと自覚すれば、むしろ自分の悩みや不安も少しは軽く受け止められるような気がした。

この一文は、碁の比喻を通して人間の本質を描き出している。人間は自由を持ちながら、同時に制約と小さなこだわり縛られた存在である。その二面性を、ユーモアを交えながらも人間を鋭く見つめる漱石の目に、私は深い感銘を受けた。そして猫という視点を通して人間を客観的にとらえ直すことの大切さも学んだ。これからは、社会の中の一つの碁石としての自分を意識しながら、小さなことにとらわれず前を向いて生きていきたい。

審査講評

作品を深く読み込むとともに自己の日常を巧みに重ね、作者の心に接近している。論理が明快で文章も読みやすい。

佳作

「生きる」って何だろう

暁星中学校 3年

篠原 将人
しのはら まさと

作品名『吾輩は猫である』
選んだ一行

「生きていてもあんまり役に立たないから、早く死ぬだけが賢いかもしれない。」

夏目漱石の小説『吾輩は猫である』の中で、特に心に残った一文は「生きていてもあんまり役に立たないから、早く死ぬだけが賢いかもしれない。」である。猫の言葉としては滑稽に響くが、人間にとっても普遍的な問いかけで、深い印象を受けた。この一文が心に残った理由を考えてみたい。

まず、この言葉の魅力は存在そのものの問いにある。人間であれ猫であれ、「なぜここににいるのか」「何のために生まれたのか」という疑問を抱かずにはいられない。答えのない問いであるが、誰もが一度は考えるテーマである。そんな問いを猫が軽く口にする事で、人間の根本的不安が鮮やかに

浮かび上がる点に心を揺さぶられた。

また、猫の視点から語られている点も重要である。人間が悩むのは当然だが、猫が同じように語ること意外性が生まれ、ユーモアと風刺が加わる。漱石は猫に託すことで、人間の迷いや愚かさをやわらかく照らし出している。真剣に考える「生の意味」を猫が軽く吐き出す姿には、皮肉が漂い、読者は苦笑しつつも共感してしまう。

さらに、この言葉には時代背景が映し出されている。明治期は西洋思想や科学が流入し、従来の価値観が揺らいでいた時代である。宗教や道徳が人生の意味を保証なくなり、人々は新しい生き方を模索していた。その中で「生まれて来た意味が分からない」という嘆きは、多くの人々の実感でもあったに違いない。猫の一言の背後には近代化の不安が透けて見える。

また、読者が容易に自己を投影できる点も大きい。私自身も「なぜ生きているのか」と考えることがあるが、答えはいまだに見つかっていないし、これからも見つからないだろう。だからこそ猫の言葉に触れたとき、自分の心の声と重なり、強く共感する。小説を読んでいるはずが、いつの間にか自分の人生を見つめ直しているのだ。

加えて、この一文は深刻な場面ではなくユーモラスな文脈の中で語られている。哲学的議論よりも猫のつぶやきだから

こそ、かえって鮮烈に響く。重苦しい説教より軽妙なユーモアの中に真実が潜んでいることを感じさせ、漱石の文学的手腕が際立つ。

このように「生きていてもあんまり役に立たないから、早く死ぬだけが賢いかもしれない。」は、存在への普遍的問いかけであると同時に、猫という視点による皮肉とユーモア、時代背景、読者の共感を含んでいる。私はこの一文に出会い、自分の生き方や存在の意味を改めて考えさせられた。漱石は猫を通して、人間すべてに共通する根本的な問いを投げかけているからこそ、この言葉は今なお色あせず、多くの人の心に響き続けているのだろう。

佳作

自転車日記を読んで

暁星中学校 3年

西澤 にしざわ
悠吾 ゆうご

作品名『自転車日記』
選んだ一行
お気の毒だね

夏目漱石の本は描写が細かくて話の進みが遅いので挫折してしまっただけだったが、「自転車日記」はイギリス留学中の漱石が自転車に乗るのに悪戦苦闘している様子がこれでもかというくらい細かく描かれているので、それが面白くて読めてしまった。

自転車に乗るのは確かに人によっては難しいと思うが、漱石の場合は絶望的に自転車に乗るセンスが無かったようで、乗ることもできないし、ペダルをこぐこともできないし、バランスを崩して転んでばかりだ。それなのに、転ぶまでの様子や気持ちを細かく書いていて、さらに常に愚痴を言っているのがまた面白かった。

一番印象に残ったのは、漱石が知人を先導して運転していた時に急に直角九十度で右折したために、その後ろを自転車走で走っていた西洋人が転んでしまった場面だ。漱石はその転倒した人に向かって「お気の毒だね」と言って走り去ってしまったところだ。その人は漱石のせいで運悪く自転車から落ちてしまったって、漱石に今の時代では禁句の差別的暴言を吐くのだが、漱石も内心は動揺しているのに、謝るところかなぜか上から目線で「お気の毒だね」と言ってしまう。

プライドが高くて、自分の立場をギリギリのところを保っているのかと思ったが、実は振り向こうと思ったがまだ自転車を降りこなせずそのまま振り向くこともできず通り過ぎてしまっただけだった。自分は別に無神経な豪傑ではないのだと言いつつしているのだ。漱石の気取ったところとメンタルの弱さが、これまで僕が思っていた偉人としての夏目漱石のイメージをくつがえした。

文句を言いながらも自転車に乗れない自分をなんとか脱したくて頑張っているの、素は真面目で努力をする人なのだろう。しかし、どこかで頭がよいエリートな自分を崩したくないと思っているから、自転車に乗れない自分の様子を客観的に冷静に分析しているような描写をしているのだろう。

漱石の文章は、人の様子や自分の心境の変化などを細かく書きすぎていて、全く話が進まないのが今まで苦手だった。

しかし、漱石の時代はテレビも携帯電話もないので、読んで
いるだけで登場人物の見た目や表情や心情が想像できるの
で、それが漱石の作品の魅力なのかと少しわかった気がした。

自転車に乗ることを提案したおばさんによって散々な思い
をして、ますます引きこもってしまった漱石が、自転車に乗
るのは何の得もなかった、無惨だったと締めくくっていると
ころに、漱石の自転車との決別の気持ちがいもこもっていて、僕
は漱石に「お気の毒だね」と伝えたくなった。

佳作

「よいご気性」の理由

白百合学園中学校 1年

清河 きよかわ
葵 あおい

作品名『坊っちゃん』

選んだ一行

いたずらと罰はつきもんだ。

いたずらと罰はつきもんだ。

この一文は、坊っちゃんの性格をよく表している文だと思う。
坊っちゃんは、驚くほどに馬鹿正直な性格といえ、曲がったこ
とが大嫌いで、誰よりも強い正義感を持っている。いたずら
はしたいが罰は受けたくないと普通は思いそうだが、セット
で考えるとところに、芯の通った人柄を感じる。

いたずらや喧嘩をして罰を受ける坊っちゃんだが、私には、
兄ではなく自分を見て欲しい、と親の気を引こうとしている
ようにも見える。父親は可愛がつてくれない、母親は兄ばか
りをひいきにし、兄は意地悪、という家庭環境の中、清だけ
がいつも味方してくれた。

しかし、坊ちゃんは清の言葉を全て受け入れ甘えるのではなく、むしろ清のようにちやほやしてくれるのを不審に考えた、言っている。私はこの点も坊ちゃんの優れた素質で、自分やさらに世の中自体も客観的に見ることが出来る人なのだと考える。そんなバランスの良い物事の見方ができるところも、清のいう「よいご気性」なのだと思う。

自分を客観視できる坊ちゃんは、自分が人から好かれる性ではないらしいことや、周りから少しバカにされていることにも気付いている。また、そのような他人からの目や言動にも、不器用な性格もあり、あまり気にしてしないそぶりを見せることもある。しかし、人はどこかで自分のプラスの面を信じたのではないか。他者から受け取る言葉や評価は、自分の性格の一部になると思う。私たちは今、自分を見つめる年齢にあるが、その時に他者から見た自分はどうしても気にしてしまう。「あなたってこうだね」という言葉は性格の一部となるのだ。

清はどんなときでも全面的に坊ちゃんを推して、「あなたは良い。あなたはできる。」と言い続けてくれた。それが、坊ちゃんが元々持っていたまっすぐさと無鉄砲さを、極端に偏らないように上手く導いてくれたのではないかと思う。坊ちゃんは、清の言葉を不審がりながらも、その言葉が支えとなったり、自信になったりしたのだと考える。だから坊ちゃ

んは大人になっても様々な場面で清を思う。心の拠り所なのである。最後は家をもつて清を住ませ、墓の面倒まで見ていく。清は坊ちゃんにとって唯一心を開ける存在だったのではないか。

心を開ける存在というのは、かけがえのない大切なものだ。坊ちゃんの幼少期の環境は良いものとは言い難かったが、一人でも自分を認めてくれる人が居たからこそ、自分の正義を信じてまっすぐに進んでいったのではないか。

私は家族以外でこういった関係性がある例を知らなかったため、身近にじっくりくるものはないが、お互いを思う二人の強い絆を素敵だと思った。

佳作

吾輩は猫である

新宿区立落合第二中学校 2年

松尾 遥馬
まつお はるま

作品名『吾輩は猫である』
選んだ一行

吾輩は猫である。名前はまだ無い。

夏目漱石の「吾輩は猫である」を読んで、僕は、「吾輩は猫である。名前はまだ無い。」という有名な一行がとても印象に残りました。この一行は物語の最初に出てくる言葉で、これを見た瞬間に「えっ、猫がしゃべっているの?」とびっくりしたのは覚えています。

この猫は、ただの猫ではありません。人間をよく観察していて、少しバカにしたような目線で人間社会を見ているところがおもしろいです。特に、飼い主である苦沙弥先生の生活や言動をちよつと冷たく、でもどこかあたたかく見つめているところに、僕はひかれました。「名前はまだ無い」という言葉も、よく考えると少しかわいそうです。飼い主が名前を

つけてくれないというのは、まるで自分の存在をきちんと認めてもらえていないようにも感じました。でもこの猫は、それを気にしているようで気にしていないふうにふるまいます。そこがなんだかつよく見えました。

僕はこの一行を読んで、「名前って何だろう」と考えました。僕たちは生まれたときから名前があつて、それが当たり前だと思つて生きています。でも、もし名前がなかったら、自分は誰なのか、他の人は自分をどう呼ぶのか、すごく不安になると思います。名前は、自分という存在を人に知ってもらうための大切なものなんだと気づきました。

でも、この猫は名前がなくても、自分という存在に自信を持つているように感じます。人間の考えをユーモアを交えて話す姿は、名前なんてなくてもちゃんと「自分」でいられるという強さを持つているようです。また、この一行には夏目漱石らしいユーモアがあるとも思いました。堅苦しい文体で始まるのに、猫がしゃべり、名前がないというギャップがおそらく、読みたくなる気持ちにさせられます。夏目漱石は、難しいことを難しいまま書くのではなく、ユーモアを使つて私たちに伝えようとしているのだと思いました。

「吾輩は猫である」の最初の一行は、とてもシンプルですが、とても深く考えさせられる一文です。この一行をきっかけに、私は「自分らしさ」や「人との関わり」について考え

るようになりました。夏目漱石は100年以上前の人なのに、今を生きる僕たちの心にもとどいていてすごいと思い、この猫のように僕も堂々と生きようと思いました。

佳作

「百年」という名の一輪

新宿区立西新宿中学校 2年

三輪 みわ
杏奈 あんな

作品名 『夢十夜』(第一夜)
選んだ一行

自分は首を前へ出して冷たい露の滴る、白い花卉はなびらに接吻した。

夏目漱石の「夢十夜」第一夜を読んだとき私はその静かな物語の中に深く心を揺さぶられるものを感じた。幻想的で短い夢の一節でありながら、そこには「待つこと」「信じること」「時間を越えた絆」といった普遍的なテーマが込められていた。

死にゆく美しい女から「百年、私の墓の傍で待っていて下さい。きつと逢いに来ますから」と告げられた男は、約束通りに彼女を埋葬し、長い歳月をただ一人、待ち続ける。やがて、墓に咲いた白い百合の花と暁の星を見て、百年が過ぎたことを悟る。そんな時間と約束、愛が交差する静かな物語だ。

その中で私の心に強く残った一文がある。それは、「自分は首を前へ出して冷たい露の滴る、白い花卉に接吻した。」という場面だ。ここには百年という時の重みが凝縮され、報われる瞬間の美しさと静かな感動が詰まっているように感じた。これは単なるキスではなく、果たされた約束の証であり、百合に生まれ変わった女の魂と男の想いがようやく結ばれる、儀式のような場面に思えた。「冷たい露」という感覚的な描写が、この幻想の中の一瞬にリアリティを与えているのも印象的だ。

特に、白い百合の存在が象徴的だ。ただ美しいだけでなく、「百年待つて再会する」という物語の主題を象徴しているように思えた。また、「百合」という言葉には「百年」や「再会」といったイメージも重なり、私は強い感動を覚えた。夏目漱石がこの花を選んだのは、決して偶然ではないと感じさせられる。

作中の「百年」とは、実際の時間というよりも「人の一生をかけるほどの長い時間」の象徴だろう。それに対して、現代は「タイパ」という言葉に象徴されるように、すぐに結果を求め、効率や即時性が重視される時代だ。そんな時代にあっても、私自身の経験から、時間をかけて得るものの大切さを実感することがある。

中学校に入ってから始めたバドミントン部では、なかなか

上達せず、何度も悔しい思いをした。しかし、諦めずに日々の練習を重ねるうちに、少しずつ自分の成長を実感できる瞬間が訪れるようになった。学習や生徒会活動も同様で、人との関わりや経験の積み重ねによってこそ得られる成長があると信じている。

誰かをそれほど長い時間待つという行為は、今では非現実的で無駄だと思われるが、この物語は、そのような時間のかかる営みの尊さをそっと伝えてくれる。

待つことには、他人を信じて待つこともあれば、自分自身の成長を信じて時間をかけることもある。百合のように、長い沈黙の末に静かに咲く成果があることを、この物語は幻想の中でしみじみと教えてくれた。私もまた、焦らずに自分の時間を大切に育てていきたい。

佳作

先生の「こころ」と僕の「こころ」

筑波大学附属中学校 2年

竹内 健人
たけうち けんと

作品名『こころ』

選んだ一行

ひとに愛想を尽かした私は、自分にも愛想を尽かして動けなくなつたのです。

僕が選んだ一行は、夏目漱石『こころ』の中に出てくる「ひとに愛想を尽かした私は、自分にも愛想を尽かして動けなくなつたのです。」という言葉だ。

この言葉は、『こころ』の中でも大きな意味を持つ「先生の遺書」の中に出てくる。

先生は、親友のKを裏切つてしまい、その結果Kが自ら命を絶つてしまった。その罪の意識を先生は生涯背負い続けることになる。人に対して心を開けなくなり、やがて自分自身にまで失望してしまうのだ。そうして先生は、自分がどうしても前に進めない状態を、この一行で表したのだと思う。

初めて読んだとき、僕はこの文章をととても恐ろしく感じた。「他人を信じられなくなり、そして自分も信じられなくなつて、完全に立ち止まってしまった」という、辛くて、でも誰にも助けを求められない先生の苦しさを物凄く感じる一文だったからだ。先生の苦しみは、ただ過去の出来事だけではなく、「自分で自分の弱さに押しつぶされること」を表しているように感じた。

中学生の僕には、先生のような衝撃的な体験はないが、この一行を読んだとき自分の中にも少し似た気持ちを思い出した。たとえば、人との関わりの中で上手くいかない時だ。誰かにきついことを言ってしまったり、思っていたのと違う行動をしてしまったたりすると、「どうして自分はこんなことをしてしまうんだろう」と思うことがある。そのとき、後悔して、落ち込んで、何もしたくなつたりする。その気持ちは、先生が書いた「自分にも愛想を尽かして」という言葉に重なるように思えた。

先生はその気持ちから抜け出すことができず、最後には絶望の中で生きる希望を失つてしまった。僕はそれがとても怖いと感じた。人は自分に失望すると前に進めなくなる。自分を信じられなくなつたとき、人は生きる力をなくしてしまうのだと思つたからだ。

でも同時に、この一行から学べることもあると思う。それ

は「自分を責めすぎてはいけない」ということだ。間違えたり、失敗したりするのは人間だから仕方のないことだと思う。大切なのは、過去を見つめたうえで、それでも自分を完全には嫌いにしないことなのではないかと思う。

『こころ』という本は穏やかに進んでいくように見えて、人の苦しみや辛さ、色々な感情が詰まった難しい本だ。でも、この一行は、今の僕の心にも強く響いた。「他人にも、自分にも愛想を尽かして動けなくなった」という先生の言葉は、人間の弱さをそのまま現したのだと思う。そして同時に、その弱さをどう乗り越えるかを考えさせてくれる言葉でもあるように思う。

だからこの一行は、僕にとって単なる文学作品の一部ではなく、生き方を考えるきっかけになる言葉になった。百年以上前に書かれた漱石の言葉が、今の僕に届いていることが、とても不思議であり、同時にありがたいことだと思う。

高校生の部

最優秀賞

人生と時の在り方

光塩女子学院高等科 2年

楊井^{やない} 思帆^{しほ}

作品名『夢十夜』（第七夜）
選んだ一行

「自分は益々つまらなくなつた。とうとう死ぬ事に決心した。それである晩、あたりに人のいない時分、思い切つて海の中へ飛び込んだ。ところが——自分の足が甲板を離れて、船と縁が切れたその刹那に、急に命が惜しくなつた。」

「自分の足が甲板を離れて、船と縁が切れたその刹那に、急に命が惜しくなつた。」この文は、『夢十夜』の第七夜において主人公が発したものだつた。

なぜ主人公は船の甲板から身を投げることを決意したのだろうか。自分の行く先に対する臆げな不安に苛まれたからだろうか。ふと自分が大きな船に乗っているのに気づいた彼は、船の男に行き先を訊ねるも、男はそれを笑つて囁すのみ。い

つ陸へ上がれるかも知れず悶々とする主人公を横目に、船は構わず黒い煙を噴きながら絶え間なく船路を進んでいく。心細さのあまり、船での無味乾燥な日々から脱却すべく、主人公は入水自殺を図つたのかもしれない。

しかし身を投げた瞬間、「命が惜しくなつた」と後悔の念を抱き、それまでの自暴自棄な感情は一転する。これは、命を自らの手で葬り去ろうとしたことへの後悔と同時に、船で実りある日々を過ごさなかつたことへの悔悟の念も含んでいると私は感じ取つた。主人公は船内で三人の人物に出会う。天文学を究める一人の異人は、星座観察する主人公に北斗七星の話聞かせ、船だけに留まらない星や海の世界を壮大に語つた。また、ある女がピアノを奏でる横である男が口を大きく開いて唱歌を歌つた、まるで船に乗っているのを忘れてゐるかのように。このように彼らは学問を究め、趣味嗜好を楽しんでいるが、一方の主人公は「天文学など知る必要がない」と一蹴し、悶々とするばかりで何もしない。そんな彼は死ぬ間際に自らの怠情を悔いたことだろう。人生という有限の時間の下で、無為の時を過ごし悔いたまま命を終えるのは愚の骨頂である、と漱石に話しかけられている気がして、私は心に火が灯るような、奮い立つ気概を感じた。

主人公が海に飛び込んだ後も、船はそれをものともせずひたすら波を裂き航海を続けていく。これは、森羅万象と時の

関係と捉えることはできないだろうか。例えば私たちが何をしようと思わずとも、構わず時は進んでいくし、乗客の事情や心情など歯牙にもかけない。主人公がどれほど戻らない時を悔やもうと、海の深淵に沈みゆく運命は変わらないのだ。この事実は、時の残酷性や不可逆性を強調しているのであらうか。時は有限で人に与えられた時は束の間である。だからこそ、私たちは有意に日々を送った方がよい。そんな漱石の言葉が聞こえてきたと同時に、時という両義的で掴み所のないものを巧みに描出した漱石の筆力に感嘆した。

私も、茫洋とした海を駆け抜ける船に乗っていると言えよう。止まることを知らないその船からいつ降りることができるとかは不透明だ。時には嵐の夜に巻き込まれるかもしれない。しかし、私は船内で星を語り、ピアノを奏で、願わくば船長になり船を牽引せんことを祈る。前途洋々な若人は今、途絶えぬ時の流れを開拓せんと邁進していく。

審査講評

真つ正面から取り組んだ素直な感想でありながら、筆力と論理的な構成力があり、一読して完成度が高く成熟を感じる。

朝日新聞社賞

一人にされたところ

田園調布学園高等部 2年

伊倉 幸奈
いくら ゆきな

作品名『こころ』

選んだ一行

「妻は私に向かって、これから世の中で頼りにするものは一人しかなくなつたと言いました。」

私は小説を読むと、大抵、登場人物の誰かに感情移入してしまう。特に意識しているわけではないが、なぜかそれは主人公ではないことが多い。今回『こころ』を読んで、私は先生の妻に感情移入をした。

先生の妻は極めて不憫である。どこが不憫かは言うまでもないが、端的に述べると、父親を亡くし、家族同然に暮らしていた下宿人に自殺をされ、結婚した夫には心の内を閉ざされ、母親を失い、挙句の果てには夫に自殺をされる。だからこそ、私は、先生の手紙の中で「妻は私に向かって、これから世の中で頼りにするものは一人しかなくなつたと言いまし

た。」という一行を読んだとき、胸が締め付けられるような思いがした。一生その人しか頼ることができないのに、その人は「死んだ気で生きていこう」と決めた人なのだ。実際、妻は夫のこの決意を知らないが、夫の心を閉ざす様子や、暗い影を持っていることには気づいていた。しかし、何度夫に尋ねても心の内を明かさな。しまいには夫は自殺をする。世の中で頼りにできるたった一人は、真実を何も語らないまま死んだのだ。

私の選んだ一行にある妻の述懐は、先生の手紙の中で二度登場する。一度目は、妻の母が亡くなった後を回想する場面で、二度目は先生が死を決意するたびに、その言葉が脳裏によぎるという描写である。私はこれらの一行を読むと心が痛む。そういった意味でこの一行は私にとって最も印象的だったのだ。

妻はたびたび夫に「あなたは私を嫌っていらっしやるんでしょう」「何でも私に隠していらっしやることあるに違いない」と問いかけるが、夫は何も打ち明けなかった。先生は、妻が自分の犯した罪を許してくれるだろうとわかっていながら、「私はただ妻の記憶に暗黒な一点を印するに忍びなかったから打ち明けなかった」と述べている。たしかに先生の考えも理解できるが、妻の立場からすれば、自分には何も伝えられないまま夫に自殺されるよりも、たとえ人間の罪や闇を

知ることになったとしても、真実を語ってもらった方が、よっぽどよかったと言えるのではないだろうか。

これらのことから私は、信頼関係とは何かを深く考えさせられた。「信頼」と「頼りにする」とは、同じような意味だと思っていたが、異なるものだとは知った。「信頼」とは、手を信じ、心を開き合う中で築かれる関係である。「頼りにする」とは一方通行な関係なのだ。つまり、「信頼」がなければ本当の意味で相手と向き合うことはできない。とりわけ、罪の意識を感じているときには、自分の過ちや醜さをさらけ出すことは簡単ではない。相手に嫌われてしまうのではないかと、傷つけてしまうのではないかとという不安から、沈黙を選ぶこともあるだろう。しかし、本当に大切な人には勇気を持って真実を語るべきなのだ。私は『こころ』を通して、人とのつながりにおいて大切なのは、信頼し合い、心を開いて向き合うことだと学んだ。

審査講評

『こころ』で先生の妻にここまで心を寄せる読み方をした感想は珍しい。先生の妻を慮って、先生に対する怒りすら感じられる素直さに好感が持てる。

紀伊國屋書店賞

漱石さん、あなたにとって小説とは

福岡大学附属大濠高等学校 1年

やまなか
山中 こはな

作品名『草枕』

選んだ一行

小説も非人情で読むから、筋なんかどうでもいいんです。

活字中毒者なら一度は聞かれたことのある「読書の何が好きなの」という問い。聞かれた時、わたしは戸惑って「暇つぶし」とだけ答えた。私にとって読書はストーリーという線路にそってドキドキワクワク揺れ動くジェットコースターのような娯楽に過ぎなかった。けれど漱石は一味違う。日本を代表する文学者の彼曰く、小説の醍醐味は、非人情的な読書なのである。

旅道中の一人の画家。彼の芸術論を中心として描かれた作品、草枕。主人公の頭の中で繰り広げられるおびただしい数の文学論、芸術論の羅列。私が選んだのは、そんな画家の「小説も非人情で読むから、筋なんかどうでもいいんです。」と

いう一節だ。

ある日、主人公は宿の女性、那美と本についての雑談を交わす。画家曰く、本は御籤のようにテキトーな所を開いて読むのが良いのだというのである。それに那美は

「初めから読まなくちゃ話の筋がわからないじゃありませんか」

と反論する。それを聞いた画家はほくそ笑んで言う。

「わたしにも分からないんだ。それだから面白いのですよ。今までの関係なんかどうでもいいでさあ。ただあなたとわたしのように、こう一緒にいるところなんでその場限りで面白味があるでしょう」と。

言わば主人公は、読者を引き込むような緻密なトリックも作り込まれたメッセージも小説には求めていないのである。彼が求めているのは意味の分からない不意の文章に心を預けること。そんな偶然の読書にこそ文学の魅力があるというのだ。

私はこの一節から漱石の、文を作り出すという行為へのとてつもない信頼を垣間見た気がした。私はずっと、本の面白味はストーリーのおかげだと信じて疑わなかった。もし、脚本を一ページでもすっ飛ばしたら、感動の根拠の道筋を見失い、台無しになってしまうと。しかし、彼はそれを、趣がないと切り捨てた。彼が重要視したのは、共感を無視した非人

情的な読書である。気まぐれに開いた場所で偶然出会って、意味も分からないまま、物語を見守る読書である。漱石の言う読書はカフェでぼんやり人を見る感覚に似ている。

その読書術では、文章はストーリーという後ろ盾を失っている。残るのはただ文章だけだ。それが面白いかどうか。それこそ、文学者の力量にかかっていると私は思う。主人公もとい漱石は、文章のみの美の可能性を、力強く信じて見せたのだ。

読書家に限らず、人間は生きる上で確実に文章と向き合う瞬間がある。生成AIが誕生し文芸問わず作品という概念自体が不安定になってきた。作品とは何か。何の為に書くのか。そんな疑問を抱いた時、私は草枕を開いて尋ねる。

審査講評

『草枕』を選んだ時点で大いに見どころを感じた。「非人情」というわかりにくい文言を噛み砕いて自身の文学観をバージョンアップしようとする点が評価できる。

新潮社賞

知りすぎた孤独の淵で

立教女学院高等学校 1年

高橋 たかはし 心羽 こはね

作品名『こころ』

選んだ一行

私は仕舞にKが私のようにたった一人で淋しくって仕方がなくなった結果、急に所決したのではなからうかと疑がい出しました。

この一行は、Kの死に対して先生が抱いた推測だ。私は良くも悪くも他人の影響を受けづらく、そのため共通の趣味を持つ友人が極端に少ない。それ自体は不都合でないはずなのに、ある時ふと寂しさが胸を突いた。

それからこの一行を読んだとき、「知りすぎた孤独」という言葉が頭を過った。自分の感情を掘り下げすぎると、他人への伝達が難しくなる。誰にも理解されず、独り真実に迫る。それが私の思う「知りすぎた孤独」だ。心を開けない先生とKの姿は、私の感じた孤独と重なった。彼らは思考の深さ故、

誰も届かぬ場所で自らを追い込んでいたのだ。先生は人生に葛藤し、くどいほど記憶を反芻する。

Kもまた、複雑な過去を持つ。神経を病み、最期まで心を閉ざした。その孤独の深さは、彼を注視していた先生すら自殺を予期できなかったことに表れている。Kは恋愛に揺らぎ、「もつとはやく死ぬべきだった」と遺書に残した。これは信念を貫こうとしていた彼が、現実との狭間で引き裂かれた証拠だろう。

一方、先生の孤独に耐えられなかった、という推測は全てを語るにはあまりに表層的だ。むしろ自分の罪を孤独のせいにして、正当化しようとしていたようにも見える。それでも私の目は二人を重ねて映す。死の理由ではなく、その手前の、誰にも届かぬ悲しみの中で。彼らには及ばないが、私自身も悩みを打ち明けられず、孤独を感じることがある。SNSで繋がっていても、心が通わず取り残される感覚は現代にこそ強まっていると思う。ただ、それも多くて数週間に一回程。彼らのように毎日思い悩むのとは違う。そもそも大抵のことは誰かに相談できる。つまり、考えすぎない方が気楽に生きられるのだ。馬鹿の方が生きやすいだなんて、案外本当かもしれない。

先日、漱石山房記念館を訪れた。そこで漱石の人生に触れ、二人と重なる面影を見た。知性と繊細さ、過去の重み。彼自

身も「知りすぎた孤独」に苛まれていたのだろう。心の本質を突く彼の文章には、深い痛みが滲む。

私が彼の作品に惹かれるのは、名もない感情に色がついていく瞬間が好きだからだ。繊細な心の動きを巧みなタッチで描くそれは、高校生の私には到底理解できなかった複雑な感情を想起させる。別れの喪失感や漠然とした懐かしさ。文学はそれを与えてくれる。「人生の伏線回収」とでも呼ぼうか。

漱石がどこまで人の心の深淵に触れたかは分からない。ただ一つ確かなのは、彼の求めた心理は非常に苦しかったということだ。彼の苦しみと作品の美しさが驚くほど比例しているのはあまりに皮肉だ。それでも彼の作品は時代を超えて読み継がれ、今も誰かの感情に言葉を与え続けている。彼のように、苦しみの中から言葉を紡ぐことで、誰かに寄り添う作品が生まれる。だから文学は読者の心に灯りをともし、私は文学の持つ可能性を信じたい。漱石のように、Kのように、孤独を抱える誰かのために、言葉はきつと生き続ける。

審査講評

あえて「表層的」な一行を選んだ上で、「知りすぎた孤独」という言葉でKと先生の姿を重ねてみせた。全体として巧みで美しい表現で文章を紡いでいる。

東京理科大学賞

心の中の白百合

光塩女子学院高等科 2年

田中 美羽
たなか みう

作品名 『夢十夜』（第一夜）
選んだ一行

「百年待っていてください。」

「百年待っていてください。」

この一文は夢の中で放たれた微かな声でありながら、読者の心に深く沁み入り、時を越えて余韻を残す。百年という時間は人の寿命をはるかに越え、現実には到達し難い長さである。それ故、この言葉は単なる約束ではなく永遠を希求する祈りのように響く。人は永遠を生きることはできない。だからこそ、到底叶わぬ誓いを託されたとき、愛の究極のかたち浮かび上がるのだろう。

待つということは日常では焦燥や退屈に結びつく。返事を待ち、春を待ち、時の流れを待ち侘びる。それらはいつか終わりが訪れることを前提とした時間である。しかし百年とい

う途方もない時間の前では、男にとって待つことはただの過程ではなく、男を生かす行為に変わる。終わりを知らぬ時を抱え込みながら、ただひたすらに待ち続ける姿は理屈を超えて祈りの純度が増していく。漱石が夢というかたちで描き出したのは、人間の心が限界を超えてもなお持続し得るという姿だったに違いない。百年という数字は永遠ではない。それでも寿命を越える長さであり、生の有限と死の無限とをつなぐ仮の架け橋のように立ち現れる。その不完全さがかえって切実である。人は届かぬものにこそ手を伸ばす。百年は、愛する者を喪った人間がどうしても追い求めずにはいられない「届かないもの」への渴望を映し出しているのではないか。待つ時間は決して空白ではない。むしろ待ち続けるという行為が心を支える軸となる。失われた者を忘れまいとする思いが、人を待たせ続けるのだ。思い出を呼び戻し、約束を胸に刻む。その持続は、大切な人を失った者の生存する意義を保ち続ける行為であり、そして祈りにほかならない。

百年の果てに訪れるものは壮大な奇跡ではなかった。ただ一輪の白百合が咲き、その花に淡い微笑が浮かぶだけである。百年の祈りが凝縮して結晶したものは、手を伸ばせば消えてしまいそうな儚さを帯びている。それでもその一瞬の邂逅は男が正しかったことを証明し永遠の愛を成就させる。永遠というものに、微かに触れることができたという証は、何より

も尊く、私の心に響いた。

この一文を読むたびに、私たちの日常もまた「待つこと」でできていると感じさせられる。言葉を待ち、人を待ち、死を待つ。それは時に苦しく、時に虚しい。しかし待つことは決して無意味などではなく、愛や記憶を信じ生き延びさせる最も素朴で強い力である。漱石の夢に描かれた「百年待つ」という行為は、不毛性を微塵も感じさせず、それどころか男の存在意義そのものに昇華されていた。

「百年待つていてください。」

この言葉には、あまりに長い時間により愛の永続の不可能性と、人間が渴望してやまない永遠というものが同時に響かせている。その矛盾が読む者を捉えて離さない。現実には百年を待つことはできない。しかし誰の心にも、白百合の花はある。だからこそこの夢は百年を越えてもなお、語り継がれていくのであろう。

審査講評

「待つ」という行為に「祈りの純度」や「男の存在意義へと昇華される」あり様を指摘する考察に感服した。言葉のセンスもよく、素晴らしい文章力。

二松学舎大学賞

代助と「時」の力

光塩女子学院高等科 2年

奥山 おくやま 夏帆 かほ

作品名『それから』

選んだ一行

「君も大分変ったね」とひややかに言った。

「君も大分変ったね」

これは主人公である代助が中学以来の旧友に放った言葉である。『それから』は、明治後期の東京で高等遊民として暮らす主人公の、人の掟に背く恋を描いた作品だ。これを単なる禁断の恋の物語だとする見方もあるだろう。しかし私には、「君も大分変ったね」という言葉に込められた、時の力が人を変化させるという世の摂理が、この作品の核心を衝いているように思えてならない。

代助は自分勝手な男である。裕福な家庭に生まれた代助は、三十歳になっても働かず、父からの仕送りで自由気ままに暮らしている。代助は仕事に対する誠実さを捨ててまでも生き

るために働く旧友や家族を、道義慾の崩壊に代えて生活慾を
発展させた「欧洲から押し寄せた海嘯」に呑み込まれる人々
として輕蔑する。また、文明により「孤立した人間の集合体」
に成り下がり、見栄を張ったり、互いの腹の中を探り合っ
たりするような虚偽と欺瞞に満ちた現代社会を「二十世紀の墮
落」と呼び痛烈に批判する。社会に出て働いたこともない代
助に何がわかるものか、と思わず言いたくなる。

だが、現代社会に組み込まれていく周囲の人々の変化を俯
瞰して嘆く彼の姿から、気が付いたことがある。代助は自ら
が周囲のように変化することを恐れ、時の力に抗おうとした
のではないだろうか。彼はどんなに周囲に勧められようとも
社会に出ようとはしない。彼の「何もしない」生き方は、変
化を避け、その場に停まり、時の力に逆らう行為であると私
には映った。そして、社会を一步引いて眺めていた彼はこの
世に不変のものはないと解っていたのではないか。これは作
中で彼が、渝^{かは}らざる愛を口にする者を偽善家としたことから
も明らかだ。それにも関わらず、彼は親友の妻への不安定な
愛に、まるで永遠を懸けるかのように全てを差し出した。彼
は親友の妻にこう告白する。

「僕の存在には貴方が必要だ。どうしても必要だ。」

常に論理的な代助が体裁や愛の代償、二人の未来など一切
の要素に目もくれず、驚くほど真っ直ぐに愛を告白する姿は、

愛への執着やある種の狂気さえも感じさせる。この時の彼に
とって、きつとその愛が不変かどうかは取るに足りない問題
であったはずだ。彼は絶対的な時の力さえ呑み込み、身を滅
ぼすような愛を貫き通すことを自ら選んだのだと思う。この
代助の選択は、あたかも時の力に挑戦しているかのようだ。

愛の代償として代助は自分の行為の責任を負い、親からの
援助を失い、生活のために職を探す。私は、代助が現代社会
に組み込まれ、「時」の支配下に入ったことに無常を覚えた。
しかし同時に、時の支配を受けながらも、愛を得た代助は「幸
福」そうに思えた。このまま時と愛に身を任せて地獄までも
落ちていくかとしているのか。これから代助にとって苦難に
満ちた生活が待ち受けているだろう。それでも私は、破滅さ
えも愛の具現なのだと思わせてしまうようなこの作品のもつ
魔力に引き込まれたのだ。

審査講評

批評家的な立場にいた代助が、親友の妻への「愛の代
償」として「現代社会に組み込まれ、「時」の支配下に入っ
た」という解釈の流れが良い。

くまもと賞

淋しい植物に出会う

広島県立海田高等学校 2年

福地 ふくち 夏穂 かほ

作品名『ころ』

選んだ一行

「私は淋しい人間です」

「私は淋しい人間です」この一文に出会ったとき、私は釘を打たれたように立ち止まった。どうして「寂しい」ではなく「淋しい」と書かれているのだろうか。同じ読み方でありながら、そこに込められた響きはまるで違う。辞書を開くと、「淋しい」には深い孤独や、涙を誘うような感情があると書かれていた。その瞬間、私は夏目漱石という作家の言葉の選び方に、ただならぬ意図を感じ取った。

「ころ」を読んだとき、私が見た先生は、すでに孤独をまとった存在だった。人と関わりながらも心の根を張らず、静かに淡々と生きている。私はその姿を「植物のようだ」と思った。水を与えなければ枯れてしまうけれど、与えられて

も素直に吸い上げることができない。むしろそれを拒むかのように、ただ静かに枯れていくのを待っている。それは、先生が自分の人生を終わりへと向かわせることに、覚悟と諦念を持っていたことを示しているようにも思えた。そこには「寂しい」では足りない、もっと冷たく痛々しい、そして死と生の狭間で罪と向きあい、孤独を抱え歩いていく「淋しい」がふさわしい。私はそう確信した。漱石は「淋しい」という字を選び、先生という人物に、静かで、痛みを抱えた孤独を宿らせたのだと解釈した。先生の孤独は、ただ友を失ったとか、他人と分かり合えないという種類のものではない。彼は過去に犯した罪を抱え、その重さとともに生き続けていた。友人Kのことを妻にさえ真実を語ることなく、自ら壁を築き、誰の手も届かない場所に閉じこもった。その姿は、外から見れば穏やかで静かだが、内側ではひたすらに朽ちていく植物のように痛ましい。漱石はその姿を一字に凝縮するかのよう「淋しい」と書いたのだと思う。私は時折、自分も孤独を感じることもある。友人に囲まれていても、心がどこか空っぽで、世界から切り離されたような気持ちになることがある。しかしそれは一時的で、時間が経てば笑顔を取り戻せるし、誰かと話せば和らいでいく。私の「寂しさ」は日常の中に生まれては消える小さな影にすぎない。だが先生の「淋しさ」は、人生全体を覆い尽くす巨大な闇だった。その違いを思う

と、言葉の選択一つが人物の存在を決定づけることに気づかされる。漱石は、人間の心の奥底に潜む、言葉にならない痛みを描こうとしたのではないだろうか。そして一人で罪と痛みと孤独を抱え込んだ。誰も傷つけない。その孤独の中に先生の優しさが垣間見える。表面的な「寂しい」ではなく、もっと深い「淋しい」という字を選ぶことで、先生という人間の本質を浮かび上がらせたのだ。私はその発見に感動した。文学は物語を読むだけでは終わらない。たった一文字の中に作家の思考と感情が凝縮され、読み手に新しい世界を見せてくれる。そのことを知った今、私はこれから本を読むたびに、文字の奥に潜む「淋しさ」を探し出したい。

審査講評

「淋しさ」という文字に表わされた先生のあり様の形容が見事で感心させられる。全体の構成も上手い。

佳作

漱石が描く心の闇と現代社会

恵泉女学園高等学校 2年

牟田口 紗代

作品名『こころ』

選んだ一行

自由と独立と己とにみちた現代に生まれた我々は、その犠牲としてみんなこの淋しみを味わわなくてはならないでしよう。

人間の心ほど扱いにくいものはない。外から見れば理性的で落ち着いているように見えても、内側には嫉妬や孤独、エゴといったドロツとした感情が渦巻いている。夏目漱石の「こころ」を読むと、その「心の奥の暗がり」がとてもリアルに描かれていることに気づく。性善説と性悪説、どちらが正しいかという議論を超えて、漱石は「人間は善も悪も抱えたまま生きている」という複雑さを提示しているように思えるのだ。

作中で印象的なのは「先生」の存在だ。知的で落ち着いた

人物に見える彼も、内側では罪悪感や嫉妬に苦しんでいる。表と裏の顔のギャップは、現代におけるSNS文化を想起させる。私たちは日常的に、画面上の「理想化された自己」と向き合い、他者の華やかな投稿に劣等感を抱く。つまり「表舞台の私」と「隠された私」という二重構造は、明治期の文学においても現代社会においても普遍的に存在しているのである。しかし漱石は、心の闇を単なる否定的要素として切り捨ててはいない。むしろ、それを直視し受け入れることが、人間の成熟に不可欠であるかのように描く。人間の弱さや嫉妬心を「なかったこと」として抑圧すれば、やがてそれは歪んだ形で噴出する。むしろ「ある」と認め、その存在を自覚することで、主体は自己とより誠実に向き合うことができるのである。近年注目される「セルフケア」や「マインドフルネス」といった実践も、この漱石的な態度の現代の変奏と捉えることができる。さらに重要なのは、心の闇が必ずしも破壊的にのみ作用するわけではない点である。苦悩や孤独を経験した者は、他者の痛みに対して敏感になり得る。そこから新しい表現や思想が生み出されることも少なくない。漱石が描いた人物たちはそれぞれに葛藤や罪悪感を抱えながらも、なお他者との関係性を模索し続ける。その姿は、弱さを共有することから生まれる連帯の可能性を示唆している。私が選んだ「自由と独立と己」とにみちた現代に生まれた我々は、

その犠牲としてみんなこの淋しみを味わわなくてはならないでしょう」という一行は私が今まで述べてきたことをより簡潔に魅力的に伝えてくれるのである。したがって「こころ」は単なる近代文学の古典にとどまらず、現代社会の自己像を映し出す鏡として読むことができる。SNSや人間関係の緊張の中で生きる私たちも、心の表裏の間で揺れ動く存在であるという点で、百年前の登場人物と本質的には変わらない。漱石が提示した「心の影」との向き合い方は、過去の文学的テーマであると同時に、現代の我々に課された倫理的課題でもあるのだ。漱石は日々迷い苦しむ現代の私たちに、人生の先輩として問題解決への端緒を見出してくれるのかもしれない。

佳作

映し鏡

光塩女子学院高等科 2年

丸山 まるやま 琴音 ことね

作品名『夢十夜』（第三夜）
選んだ一行

その小僧が自分の過去、現在、未来をことごとく照して、
寸分の事実も洩らさない鏡の様に光っている。

『御前がおれを殺したのは今からちようど百年前だね』

この言葉を皮切りに主人公の男は自らが犯したかも分からない罪の意識に突如苛まれ、背におぶった子供の重さを感じながら物語は幕を閉じる。

「夢十夜」第三夜。夏目漱石が描く十の夢の話の中でも怪談話のような雰囲気を纏う本作は、男が背に自らの子供を背負いながら暗い田舎道を歩く描写から始まる。何故か盲いである子供は、不思議なことに次に起こる事象を言い当て、男を当惑させていく。子供の言動に従わなければいけないという不気味な緊張感の中、子供は杉の根の前で冒頭に引用した

台詞を吐く。

このいかにも夢らしい不思議な出来事を、作中で男はこう表現する。

『その小僧が自分の過去、現在、未来をことごとく照して、寸分の事実も洩らさない鏡の様に光っている。』

「夢十夜」第八夜にも鏡が登場するが、それを鑑みるに、漱石にとつて鏡とは映るものの本質を顕わにするものなのではないだろうか。子供はただそこに「いる」だけで男は自分の全てを見透かされているように感じて狼狽してしまうのだ。

ではこの子供は男の何を映し出しているのか。私はこの子供は人間の原罪、欲望や自己顕示欲といった人間の醜悪さの権化であり、それを映し鏡として映し出し突き付ける存在であると考えた。基本的にそのような感情は無意識に内から湧き上がるものである。それ故の「自分の子」という表現なのではないだろうか。漱石は自らの出自によりエゴイズムを酷く嫌っており、それは他の多くの作品からも感じ取ることができる。本作も漱石がエゴイズムと人間の切っても切れぬ関係性を描こうとしたものだと感じた。百年前に子供を「殺した」という罪を糾弾されたのは、その昔男が生まれるずっと前から有していた潜在的な原罪に目を瞑って、今まで忘れてきたことを子供に突き付けられたということなのではないだ

ろうか。それ故、まるで原罪の重さが体に食い込むように、子供の異常な重さが男に実感されたのだと考えた。

「夢十夜」の題を冠するのに相応しすぎるほどに不思議かつ肝の冷える本作の初読後、奇妙な読後感と、読者も自らの過去を振り返らざるにはいられないような吸引力があった。作中に罪を犯したとされる江戸時代から漱石の生きた時代、そして現在私達が生きている令和まで、案外人間の根源的な性質は変わっていないのかもしれない。自らの持つエゴイズムや醜悪さを映し出す鏡は現在にもあるのか。それは分からない。が、罪を負った人間という意識を持った上で自分の中でそれを咀嚼し、共に生きていくことが人間に課された使命なのだということを感じさせられた一作であった。

佳作

心

仙台育英学園高等学校 1年

原^{はら} 慧^{けい}百^と

作品名『こころ』

選んだ一行

私はその時心のうちで、始めてあなたを尊敬した。あなたが無遠慮に私の腹の中から、或る生きたものを捕らまえようという決心を見せたからです。私の心臓を立ち割って、温かく流れる血潮を啜ろうとしたからです。

『こころ』は読む度に印象が変わる不思議な作品だ。最初は先生の抱える孤独とKとの間で起こった悲劇的な恋物語に心を痛めた。しかし私が最も強く心を揺さぶられたのは先生が「私」という青年に宛てた遺書の一節だ。他者の内面に踏み込むことの真の意味を、鮮烈な比喻をもって私に突きつけてきたからだ。

この言葉は先生が自らの過去の告白を決心する場面で語られる。「私」は先生がひた隠しにする過去を、純粹な、しか

し執拗な探求心で知ろうとする。先生はその若さ故の無遠慮さをいなし遠ざけようとするが、その真摯な眼差しが単なる野次馬的な好奇心によるものではないと悟った時、先生の心境は変化する。そしてその「無遠慮」なまでの探求心を「尊敬」という言葉で受け止めたのだ。

「心臓を立ち割って、温かく流れる血潮を啜ろうとした」。これほど暴力的で生々しい表現があるだろうか。これは他人の秘密や過去を知るといふ行為が決して生半可なものではないという先生の覚悟の表れだ。他人の心を本当に理解しようとするならば、その人の最も柔らかな、血の通った部分に触れなければならない。それは美しい部分だけでなく、醜さや弱さ、罪の意識といったどろりとした感情の奔流をも受け止めることと同義である。先生は「私」にその覚悟があると見抜き、自らの「心臓」を差し出す決意をしたのだ。

現代に生きる私たちはSNSを通じて無数の人々と繋がりを、日々他者の断片的な情報に触れているが、その関係性はどうまで「生きたもの」に触れているだろうか。私たちは他人の綺麗な部分や成功した姿だけを追い求め、その裏にある葛藤や苦悩から目を背けてはいないだろうか。他人の心に深く踏み込むことを「お節介」「プライバシーの侵害」と恐れ、当たり障りのない距離感を保つことがいつしか処世術となってしまうように感じる。表面的な共感の言葉は交わしても、

相手の「血潮を啜る」ような真の関わりを持つことへの覚悟が私たちには欠けているのかもしれない。

先生は叔父に裏切られ親友を裏切ったという過去から人間不信に陥った。その闇の中から先生を掬い上げたのは、皮肉にも彼の内面を抉ろうとした青年の純粹で無遠慮な眼差しだった。それは希薄な人間関係の中で孤独を感じていた先生にとつて、唯一信じるに足る人間との出会いであった。だからこそ先生は自らの死を以てその「尊敬」に応えようとした。自分の血潮を浴びせることで「私」の中に新しい命、すなわち人間のエゴイズムや孤独を乗り越える糧が宿ることを願ったのだ。

友人や家族、これから出会う人々とどう向き合うべきか。ただ優しい言葉をかけるだけでなく、時には相手の心に深く踏み込み、その痛みを分かち合う覚悟があるか。困難や苦痛を伴う道かもしれないが、その先にしか本当の信頼や理解は生まれない。漱石が投げかけたこの重い問いを、私はこれからも自分の心で考え続けたい。

佳作

再会と別れ

東京都立桜修館中等教育学校 2年

本多 彩羽 ほんだ いろは

作品名『夢十夜』（第一夜）
選んだ一行

真白な百合が鼻の先で骨に徹えるほど匂った。

この一文は、主人公が生前の愛する女性と誓い合った「百年待つ」という約束が実現した瞬間を書いている。直前の文では「すらりと揺ぐ茎の頂きに、こころもち首を傾けていた細長い一輪の蕾が、ふつくと弁を開いた」と、百合の花開く情景が書かれており、自然と目に浮かぶような美しい表現である。一方で、花は置かれた状況によって様々な意味を持つ。捉え方によって喜びや幸せの象徴にも、悲しみや憎しみの象徴にもなり得るのだ。

私はこの一文に喜びも切なさも感じた。主人公にとって待つ時間は、日が昇り沈むだけの単調なくり返しであった。しかし百年の果てに、やっと百合が咲いたのだ。きっと愛する

人が形を変えて会いに来たのだろう。「百年待つ」と誓った女性との約束がついに実り、私は安堵の気持ちを覚えた。主人公の「待つこと」そして「信じること」が報われた結果だと思う。百合は、そんな主人公の愛が時を越え、死をも越えて存在し続けた証なのである。

しかし、この百合は切なさも含んでいると感じた。もともと一本の白い百合は、「死者に捧げる花」として有名である。死と深く結びついた百合が咲いたということは、同時に愛する人の死は変わらないのだと突きつけられたように思う。直接彼女と語り合う再会ではなく、花という静かな形での出会いであったからこそ、切なさが漂うのだろう。百合は愛が時間と死を超えて存在し続けた証であると同時に、永遠の別れを映す象徴でもあるのだ。

また、そんな複雑な気持ちとは裏腹に、この物語には愛する人の死や墓に埋めたこと、百年待った末に百合が咲く場面に至るまで、沢山の自然の描写がちりばめられている。大きな真珠貝や星の破片、唐紅の天道など、あまりにも鮮やかで美しい情景は、これらすべてが夢の中の出来事であることを思い出させる。夢には終わりがある。いつか目覚める時がある。二人の愛が形を変えて再会した後に残っているものは、何もないのだ。私は百年待った主人公の愛が一夜限りの夢であったという儚さが、この本最大の魅力であると思う。

私は例え夢であっても、誰かを信じて百年間愛し続けることが出来るだろうか。正直に言えば、私には到底できそうにないと思う。人は時間の流れの中で心が揺れ動き、忘れたり諦めたりしてしまうことが多いからだ。それでも主人公はただひたすらに待ち続け、最後まで信じ抜いた。信じた先に待ち構えている結末が切なく悲しいものであっても、彼はその約束を守り抜いたのである。最後の「百年はもう来ていたんだな」という感動とも喪失感とも捉えられるセリフからは、彼の愛の強さを痛感した。

私が選んだ一行は、そんな主人公の言葉では言い表せない心情を全て詰め込んだ、一行である。

佳作

星の破片

東京都立新宿高等学校 1年

もりむら
森村 志季

作品名『夢十夜』（第一夜）

選んだ一行

それから星の破片の落ちたのを拾ってきて、かろく土の上へのせた。星の破片は丸かった。長い間大空を落ちている間に角がとれて滑らかになったんだろうと思った。

夏目漱石の『夢十夜』（第一夜）は、夢の中で起こった出来事で、不思議な余韻を残す物語である。その中でも、私に心に残ったのは次の一文である。「それから星の破片の落ちたのを拾ってきて、かろく土の上へのせた。星の破片は丸かった。長い間大空を落ちている間に角がとれて滑らかになったんだろうと思った。」

この文章は、物語の終盤、主人公が百年の時を経て、女の墓のそばに白い百合の花が咲いているのを見るまでの過程に出てくる文章である。物語の核心に近いにも関わらず、この

「星の破片」が何を象徴しているのかは明示されておらず、読者に解釈を委ねているように思える。私はこの一文に、時間、記憶、そして再生といったテーマが込められているのではないかと感じた。

まず注目すべきは、「星の破片」が「丸かった」という表現である。星が落ちてくる過程で角が取れ、滑らかになったという描写は、非常に詩的であると同時に、百年という長大な時間の流れを視覚的に象徴しているように見える。「自分」は女の「きつと逢いにきますから」という言葉を信じて、百年間待ち続けた。人が百年の時を待つことは現実には不可能だが、夢の中ではそのような時間感覚の飛躍も自然に受け入れられる。その百年の間彼の中で悲しみや愛情、期待といった感情が絶えず渦巻いていたのではないだろうか。そして、時間の流れとともにそれらの感情は少しずつ角がとれ、やがて「星の破片」のように丸く、滑らかになったのかもしれない。

また、星は本来、遠く手の届かない存在であり、「空の彼方にあるもの」や「死者の世界」とも重なる象徴である。その破片が地上に落ちてくるということは、天上と地上、生と死、記憶と現実が交差する瞬間を意味しているように思える。さらに、「かろく土の上へのせた」という描写も興味深い。星の破片はあくまでも優しく置かれる。これは主人公の心の

変化を表しているとも取れる。死を前にした女の言葉に従い、象徴的な何かを主人公は大切に、大事に扱っている。その姿勢からは、もはや執着や苦しみではなく穏やかな受容のようなものが感じられる。

このように見ると、「星の破片」は単なる幻想的なイメージではなく、主人公の感情の変化、彼の信じ続けた思いが百年の時を経て形をなしたものの象徴とも考えられる。

それは過去の記憶であり、彼自身の魂のかげらだったかもしれない。読者にとってもこの一文は、自分自身の中にある「長い時間をかけてようやく丸くなった何か」に気付かされるきっかけとなるのではないのだろうか。

この短い物語の中で、漱石はあえて説明を避け、象徴と余白を多く残しているように感じる。だからこそ、この「星の破片」のような一文には、何度読んでも新たな意味を見いだせる奥深さがあるのだと思う。

佳作

でも確かに熱を持っていた

東洋女子高等学校 1年

上橋 かみはし 由奈 ゆな

作品名『三四郎』

選んだ一行

解る解らないはこの言葉の意味よりも、寧ろこの言葉を使った女の意味である。

「解る解らないはこの言葉の意味よりも、寧ろこの言葉を使った女の意味である。」

これは語り手が主人公三四郎の心情を説明しているものだ。この一文を読んだとき、胸のどこかが熱くなった。誰かを特別だと感じたとき、言葉にできないざわめきが心の奥に広がっていく、そこに共感した。静かなのに、消えずに残ってしまつて気づけば日々の景色まで変えてしまうような、不思議な感覚。たぶん三四郎もそうだったのだと思う。自分の知らなかった世界や感情を知り、戸惑いながらも引き寄せられていく。どうしようもない感情をどうにかしようとする

かえって悪化する。その姿に自分自身が重なった気がした。三四郎は、熊本から東京へ出てきた青年。新しい土地での生活、人との出会いや感情。すべてが不安定で、だけど確かに何かを動かしている。なかでも、美禰子との関係は、彼にとって特別なものだった。べつに恋と呼べるほどはつきりしているわけではない。でも彼女の言葉にふと足が止まり、考え込んでしまつたり、些細なやりとりが頭から離れなくなつたり。そういう「説明できない感情」の存在がこの物語にはいくつもある。

私が選んだこの一文は、美禰子と向き合っている三四郎の心の内を描いた場面である。何かが変わつてしまふような予感と、それをまだ言葉にできないもどかしさが丁寧に表されている。日常をただ流れるように生きていた三四郎が、自分でもはつきりしない「熱」に触れた瞬間、人が変わっていく時はきつと、こういう風に始まるのだと思う。大きな出来事ではなく、ふとした会話や表情が、心を動かし火をつける。その火はとても静かだけどしっかりとそこにあつて、簡単には消えない。

「三四郎」という題名を見たとき、単純に中心人物名だと考えた。それは、あまりにもありきたりで、どこか無防備。むしろ、記号のように思つていた。漢数字が続いているのにすら不思議に感じた。しかし読後、その名前の中には若さゆ

えの迷いや、成長の途中での不安定さ、そしてまだ形にならない想いの全てが詰まっているように思う。この物語では、何も大きなアクションはない。けれど、三四郎のなかではたしかに何かが動いている。私もまだ、今の自分の気持ちに名前をつけることができない。だけどこの一文にあって、そんなわからなさも、おそらくいずれ大切な何かに気づくことができるかもしれないと、そう思えた。

佳作

「こころ」を読んで

福岡県立小倉高等学校 2年

江藤 清華
えとう きよか

作品名『こころ』

選んだ一行

私は死ぬ前にたった一人で好いから、他^{ひと}を信用して死にたいと思っている。あなたはそのたった一人になれますか。なつてくれますか。あなたははらの底から真面目ですか

夏目漱石の「こころ」を読み、私の心に深く残った一行は「私は死ぬ前にたった一人で好いから、他を信用して死にたいと思っている。あなたはそのたった一人になれますか。なつてくれますか。あなたははらの底から真面目ですか」という言葉です。この言葉には「先生」の過去の出来事や人間不信から生まれる、本当は人を信じたいという切実な思いが込められていると感じました。

「先生」は過去の経験から深い疑念を抱き、人間そのものを信用できなくなっていました。しかし、心の奥底では人を

信じたいと願っていました。この一文は、その相反する思いを端的に表しているように思います。疑いと信頼という二つの感情の間で揺れ動きながらも、「たった一人で好いから信じて死にたい」と語る「先生」の姿は、人間の弱さや本質を映し出していると感じました。

また、この言葉には、他者を信じることは自分を相手に委ねることでもあるという意味が込められていると思います。「先生」は人を信用することで裏切りや痛みを経験してきたため、自分を託すことができませんでした。しかし、それでも死ぬ前にもう一度だけ人を信じたいと願わずにはいられなかったのです。その思いは、人間が本質的に他者を必要とし、孤独のままでは生きられない存在であることを示しているように思えます。

私はこの一文を読み、人を信じることの難しさと重みについて考えました。人はときに裏切られ、傷つき、その経験から他人を疑うようになるかもしれません。しかし、どれほど疑い深くなっても、完全に孤立して生きることができないと思います。信じたい、信じられたいという思いは、人間である以上消えることのない欲求なのだと思います。だからこそ「先生」の言葉は矛盾を抱えながらも、痛烈に心に響いてくるのだと感じました。

繰り返される問いかけには、「私」を信じたいという気持ち

ちと同時に、本当は騙されているのではないかという恐れが混ざっていると思いました。この感情は「先生」だけのものではなく、私たち自身にも通じるものだと思います。相手が本当に自分を大切に思っているのか、裏切られることはないのかと疑い続けているだけでは、関係は進展しません。結局、信じることでしか絆を築くことはできないのです。この矛盾は人間にとって普遍的なものだと感じました。

「私は死ぬ前にたった一人で好いから、他を信用して死にたい」という「先生」の言葉は、人間の本質的な孤独と、本当は人を信じたいという切実な願いを表していると思います。どんなに疑いにとらわれても、最終的に他者を必要とするのが人間の本当の姿なのだと思います。私はこの一文を読むことで、自分自身もまた、人とのつながりの中でしか生きられない存在なのだということを強く実感しました。

読書感想文 選んだ一行

惜しくも入賞を逸しましたが、最終審査候補となった作品と、その「わたしの一行」を掲載します。

《中学生の部》

学習院中等科 3年

題名 「吾輩は猫である」の僕の一行

作品名 『吾輩は猫である』

選んだ一行 もうよそう。かつてにするがいい。がりがりはこれぎりごめんこうむるよ

学習院女子中等科 3年

題名 私の人生、「自分」の人生

作品名 『夢十夜』（第七夜）

選んだ一行 自分はますます詰まらなくなった。とうとう死ぬことに決心した。

白百合学園中学校 1年

題名 漱石と「無」

作品名 『夢十夜』（第二夜）

選んだ一行 無は中々出てこない。出てくると思うとすぐ痛くなる。腹が立つ。無念になる。非常にくやしくなる。

新宿区立落合第二中学校 2年

題名 過去が突きつけるナイフ

作品名 『いっころ』

選んだ一行 他に愛想を尽かした私は、自分にも愛想を尽かして動けなくなったのです。

新宿区立落合第二中学校 2年

題名 生きること、死ぬことへのありがたさ

作品名 『吾輩は猫である』

選んだ一行 南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏。ありがたいありがたい。

千代田区立九段中等教育学校 1年

題名 私の一行

作品名 『夢十夜』（第三夜）

選んだ一行 文化五年辰年だろう 御前がおれを殺したのは今からちょうど百年前だね

《高校生の部》

済美高等学校 3年

題名 正直は誰のためにあるのか―夏目漱石「こころ」を

読んで―

作品名 『こころ』

選んだ一行 要するに私は正直な路を歩くつもりで、つい足を滑らした馬鹿ものでした。

恵泉女学園高等学校 2年

題名 疑って、信用して、受け入れる

作品名 『こころ』

選んだ一行 私は過去の因果で、人を疑りつけている。だからじつはあなたも疑っている。しかしどうもあなただけは疑りたくない。あなたは疑るにはあまりに単純すぎるようだ。私は死ぬまえにたった一人でいいから、ひとを信用して死にたいと思っている。あなたはそのたった一人になれますか。なつてくれますか。あなたは腹の底から真面目ですか

恵泉女学園高等学校 2年

題名 「矛盾」を包容する

作品名 『こころ』

選んだ一行 「精神的に向上心のないものは馬鹿だ」

東京都立桜修館中等教育学校 2年

題名 あなたは腹の底から真面目ですか？

作品名 『こころ』

選んだ一行 あなたは腹の底から真面目ですか

東京都立新宿高等学校 1年

題名 美しくもあり、切なくもある再会

作品名 『夢十夜』（第一夜）

選んだ一行 自分が百合から顔を離す拍子に思わず、遠い空を見たら、暁の星がたった一つ瞬いていた。

福岡県立小倉高等学校 2年

題名 自分の「こころ」ばかり

作品名 『こころ』

選んだ一行 私にとって一番楽な努力で遂行できるものは自殺よりほかにない